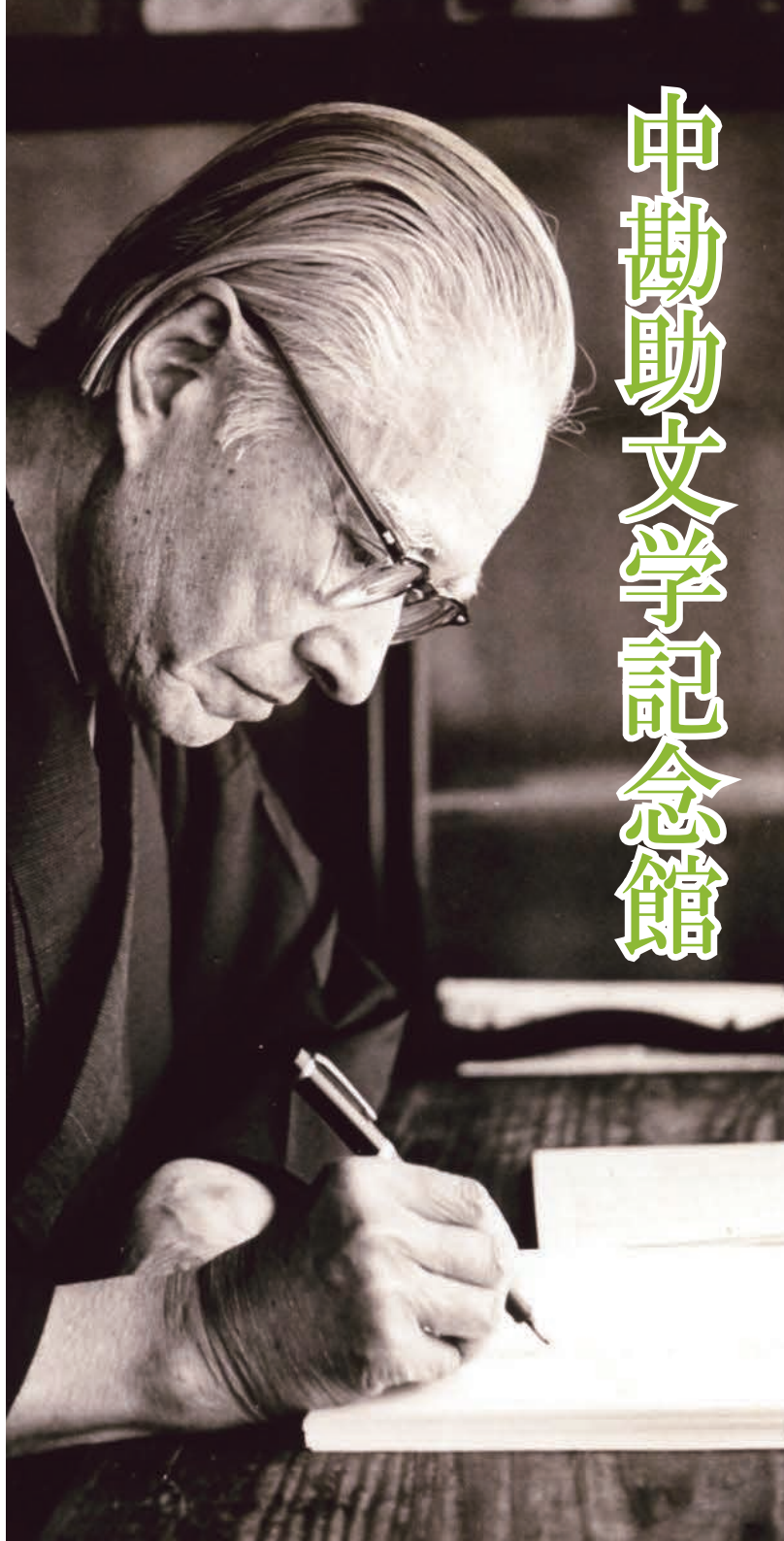




静岡市は、中勤助が住んだ旧前田邸を「中勤助文学」の記念碑として位置付け、活用していくため、平成四年度から杓子庵の復元や邸内の整備、作品や資料の収集を進めて参りました。また、平成六年の秋には、ご遺族から遺品等のご寄贈もいただきました。そして、中勤助の生誕百十年目（没後三十年目）にあたる平成七年六月に「中勤助文学記念館」として開館いたしました。

これを機に、静岡市では皆様方と共に中勤助の心を受け継いでいきたいと考えています。この地が氏の業績の顕彰の場として、また、様々な文化活動を通しての心のふれあいの場として、多くの皆様に活用されることを願っております。



中勤助文学記念館



施設利用のご案内

- 開館時間** 午前10時～午後5時
- 休館日** 月曜日（祝日の場合を除く）
祝日の翌日（土・日曜の場合を除く）
年末年始（12月26日～1月5日）
- 入館料** 無料
- 和室の利用について** 和室八畳二室、十畳、七畳半が利用できます。
◎句会、朗読会、歌会、茶会、作品展覧会などの文化活動にご利用いただけます。（無料）
【申込方法】
下記、中勤助文学記念館宛に利用予定日の6か月前から2週間前までに申請書を提出してください。
（申請書は静岡市のホームページよりダウンロードできます。）
※見学のみ場合は申込不要
- 交通** バス しずてつジャストライン 薬科線
「新静岡」2番のりば または「静岡駅前」3番のりば 乗車、「見性寺入口」下車、徒歩4分
車 新東名静岡SAスマートICから約10分
東名静岡ICから、
国道362号（薬科街道）千頭方面へ約25分
駐車場（4台分）あり

中勤助文学記念館

〒421-1201 静岡市葵区新聞 1089-120

電話 054-277-2970

<https://www.city.shizuoka.lg.jp/s9635/s005277.html>



オ 7 シ ス 静岡は奥が深い ▶ <http://www.okushizuoka.jp/>

杓子庵



■ 復元された杓子庵

小説『銀の匙』で知られる中勤助は、昭和十八年（一九四三年）十月、転地静養のために東京を離れて夫妻で静岡市郊外（旧安倍郡服織村新聞）に移住しました。中勤助は、前田家の離れを借り、羽鳥に移るまでの一年半をここ樟ヶ谷の庵に住みました。はじめは、庵の下の粟畑にちなんで「粟穂庵」と命名しましたが、季節が移り杓子菜（おたま菜）の盛りになると「杓子庵」と変えました。中勤助は、この庵で薬科川を眺め、月を仰ぎ、野草を愛で、鳥の声に耳を傾けながら静かに文筆生活を送りました。折りからの厳しい戦局の中にあっても、患われた村の自然に感謝し、新聞の人々と素朴なふれあいをよるこびながら、その生活を随筆「樟ヶ谷」の中に純粋に描きました。また、俳句を初めて作ったのも、ここ杓子庵のことでした。このため、中勤助は自らの俳号を「杓子」としました。

杓子庵の由来（中勤助の作品「樟ヶ谷」より）

きのふは大雨、けふは研ぎすました刃のやうに冴えて夜があげた。その一抹の曇りもない空が朝の食事のすむ頃には暗黒の恐ろしい雲を頭上に舞ひ狂はせてゐた。この山峡は雲の乱舞場である。

南天が色づきそめた。どす赤い山椒の実はまだ黒くなつただらう。葉を落して枝や幹の面白くさびた木もこかしこに見えはじめた。むかうの畑の杓子菜は今が盛りだ。そこでこの庵の名も杓子庵とかへることにした。季節と作物にしたがつて名のかはる庵もあつてよいであらう。

杓子庵どぶろく白き後の月
人の世をしぐれてやれし旅の笠

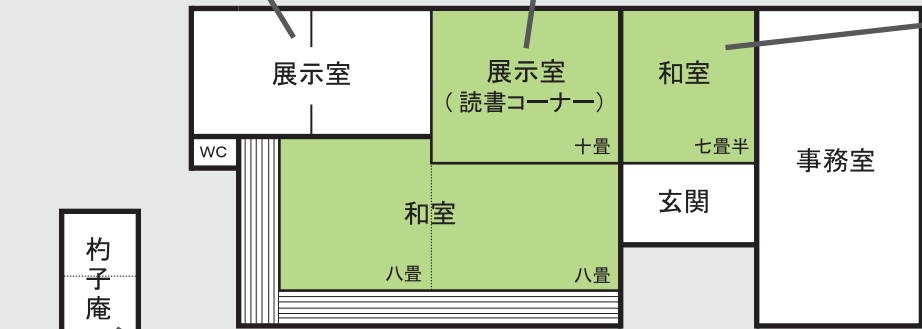
（昭和十九年十一月四日）



■展示室



■展示室（ゆっくり過ごせる読書コーナーあり）



■七畳半の和室

和室の利用について

◎句会、朗読会、歌会、茶会、作品展示会などの文化活動にぜひご利用ください。

【利用可能な和室】

- ・和室八畳（二室）
- ・和室十畳
- ・和室七畳半

※申込方法等は、裏面の「施設利用のご案内」をお読みください。



■玄関

和室の利用について

◎句会、朗読会、歌会、茶会、作品展示会などの文化活動にぜひご利用ください。

【利用可能な和室】

- ・和室八畳（二室）
- ・和室十畳
- ・和室七畳半

※申込方法等は、裏面の「施設利用のご案内」をお読みください。

中勸助文学記念館の四季

中勸助が愛した服織の自然。
文学記念館では、四季折々の草花が皆様をお迎えします。



▲ 蛸梅（ろうばい）
▲ 苧の薺（ふきのとう）

杓子庵を去った後の中勸助



中勸助は、昭和 20 年 3 月、同じ服織村（現 静岡市）の羽鳥に移り、終戦を迎えました。羽鳥での住居を「靴のや（牛鳴庵）」「忘れ庵」と呼んでいます。

この地で後に『鳥の物語』を構成する作品が執筆されています。

中夫妻は、一時は服織村への永住を考えながらも、昭和 23 年 4 月に静岡を後にして東京へ戻りました。

しかしその後も、昭和 32 年の服織中学校の校歌の作詞や手紙のやりとり、文学碑「風のごとし」の建立など、服織の人たちとの交流は続き、幾たびも服織の里を訪れています。

夏目漱石と中勸助



明治 35 年、第一高等学校に入学。

明治 38 年に東京帝国大学英文科に進んだ中勸助は、この間に一高と東京帝国大学の講師であった夏目漱石の英文学の講義を受けました。これが夏目漱石との出会いでした。

漱石の「吾輩は猫である」が好評を得ていたにもかかわらず、文学に対する美意識の違いから漱石作品の愛読者ではなかったと、中勸助は当時を振り返って述べています。ただ、この頃から、同級の小宮豊隆などが漱石の自邸をたびたび訪れるようになり、それら友人を通して、漱石との個人的な交流を楽しみました。

中勸助は、東京帝国大学卒業後、野尻湖畔で処女作となる「銀の匙」を書き上げ、明治 45 年に漱石の閲読を乞い原稿を送ります。「銀の匙」は、漱石の意見を得て若干の手直しがされた後、漱石の推薦により、東京朝日新聞に掲載（大正 2 年）され、中勸助は作家として認められるようになりました。また、「銀の匙」の後編となる「つむじまがり」も同様に漱石の推薦により、東京朝日新聞に掲載（大正 4 年）されています。



小説『銀の匙』の題名の由来となった銀製の匙（中 秀様 提供）



『銀の匙』単行本表紙図絵は、神田明神の「諫鼓鶏」の山車。兄嫁の末子が下絵を描いた。

中勸助 服織での主な作品

■服織で執筆した作品

「鶴の話」「ひばりの話」「鶯の話」「白鳥の話」「結婚」「余生」「遺品」など。
詩、短歌、俳句なども相当量雑誌に発表。

■服織を題材にした作品

「樟ヶ谷」「羽鳥」「村の酵母」「盲目」「名月」「わらしな川」「姉妹」「風のごとし」など。
この他、帰京後の随筆や小品にも服織の名は度々登場。

中勸助 略年譜

参考：岩波書店版『中勸助全集』17 巻収録年譜
※ 年齢は数え年で表記

年 号	歳	出 来 事
明治 18 年(1885)	1	5 月 22 日、東京神田に父 勸弥、母 鐘の五男として生まれる。両親と姉 2 人、兄 1 人（兄 4 人のうち 3 人は夭折）、妹 2 人の家族。外に『銀の匙』の伯母が同居。
明治 35 年(1902)	18	9 月、第一高等学校入学。 夏目漱石の講義を受ける。 （同級に安倍能成、小宮豊隆、野上豊一郎、藤村操など）
明治 38 年(1905)	21	東京帝国大学英文科入学。 引き続き、夏目漱石の講義を聞く。
明治 40 年(1907)	23	9 月、国文科へ転科。明治 42 年卒業。
明治 45 年(1912) （大正元年）	28	信州野尻湖畔に滞在し、「銀の匙」を執筆。 9 月、夏目漱石に原稿を送り閲読を乞う。
大正 2 年(1913)	29	4 月、夏目漱石の推薦により「銀の匙」が東京朝日新聞に掲載される。
大正 3 年(1914)	30	脚気療養のため信州追分に転地。 帰京後、比叡山横川に転地。 「銀の匙」の後編を執筆。
大正 4 年(1915)	31	4 月、「銀の匙」の後編が東京朝日新聞連載。
大正 5 年(1916)	32	夏目漱石死去。
大正 6 年(1917)	33	「漱石先生と私」発表。
大正 9 年(1920)	36	千葉県我孫子に仮寓。 志賀直哉と交わる。「提婆達多」脱稿。
大正 13 年(1924)	40	神奈川県平塚に家を建てる。
昭和 7 年(1932)	48	4 月、「雁の話」（『鳥の物語』第一作）執筆。 東京赤坂に移る。
昭和 17 年(1942)	58	4 月、兄嫁 末子死去。10 月、嶋田と結婚。同日、兄 金一死去。 兄嫁を追慕する随筆「蜜蜂」を執筆。
昭和 18 年(1943)	59	10 月、安倍郡服織村新聞（現 静岡市葵区新聞）に転地静養。
昭和 20 年(1945)	61	3 月、服織村羽鳥（現 静岡市葵区羽鳥本町）に移る。
昭和 23 年(1948)	64	4 月、帰京。東京中野の妻の実家に移る。
昭和 35 年(1960)	76	12 月から『中勸助全集』（角川書店）刊行開始。（昭和 38 年完結）
昭和 40 年(1965)	81	1 月、『中勸助全集』の完結と多年の業績により、朝日賞を受賞。 5 月 3 日、くも膜下出血のため死去。